

第Ⅳ章 報告方法の整理

第 1 節 試掘調査

試掘調査は昭和59年度に実施した調査を基本としながら、改めて各調査地区毎に実施した(第7図)。前者は西区全体を対象に実施した点的な調査であり畑地などの縁辺、道沿いなど土地所有者の承諾の得られた箇所において実施されたものであった。既に報告書が刊行されており周知のとおりである(松川ほか1986)。本書は今回の調査にあたって常に携行し発掘調査の際の指針となった。しかし実際には各調査区の中心部を発掘していないことなどから遺構の遺存状況や堆積状況等、調査計画立案に際していささか不足があることも否めない。このため各調査区本調査を実施するにあたっては着手当初に試掘調査を実施している。2次調査はⅡ区を対象としてI-13・15、K-15グリッドの一部において試掘を行い地下遺構の遺存状況の確認に努めた。3次調査は広範囲の箇所を試掘し、その結果遺物包含層が当該地区には認められないことから記録保存を目的とした本調査は必要のないことを確認した。5次調査ではT-17杭を基点に50cm幅のトレンチを設け地下遺構の把握に努めている。6次調査の試掘調査は、表土層を除去した段階で岩盤が露頭していたこともあり試掘を実施せずに本調査へ着手している。7次調査でも表土層を除去した時点で広範に岩盤が露頭していたため試掘を必要とせずに本調査へ着手した。8次調査では客土層を除去した段階で試掘トレンチをP-23杭を基点に50cm幅で設定、地下遺構の把握に努めている。9次調査では遺跡が広い範囲であることから10mグリッドの境界線に沿って田の字形にトレンチを設定し調査区全体の把握を目的とした試掘調査を行っている。基点となったのはN-18・19やO-19などである。10次調査では客土層が残存することから試掘トレンチを設定することはできなかったためL-17グリッド等において点的な調査を実施することとした。1・3次以外の試掘調査は各地区における本調査着手直前の調査のため、出土遺構や遺物については次章の報告に盛り込まれているのでここでは割愛する。また、1次調査については先述したように報告書が刊行されている。なお、1次の試掘調査の遺物と今回調査出土資料は接合作業等を行っていない。

ここで紹介する試掘調査は3次調査の調査成果についてである。3次調査として実施した試掘調査は主に2つの視点から実施した。一つはハラクブ地区が今帰仁城跡西端の西側斜面に所在することから、遺跡の延長が当該地域まで延びているか、延びていないか。2点目はハラクブ地区は岩盤の露頭する地域で今帰仁城跡に接した地点であることから、石切場などの今帰仁城に係わるなんらかの痕跡が存在するかどうかである。前者を確認するために、工事計画地域4,100㎡をカバーするように、10m×10mの方形区画内に1箇所の間隔で試掘坑を設けた。試掘調査は重機を利用し岩盤もしくは明確な地山が確認されるまで、掘削を行った。調査の結果41箇所の試掘坑全てに於いて明確な包含層を確認することはできなかった。僅かに、T.P.12・15において盛土(客土)除去後に検出された旧表土から、8-1の青花碗口縁部が出土している。しかし、T.P.12・15を中心とした一帯には明確な包含層などは認められず上方の遺跡からの流れ込み的な遺物散布地と想定された。また、T.P.22では8-2の青磁酒会壺の蓋が得られている。他にも本グリッド周辺より遺物が数点表面採集で得られており(8-4・8-5)、後者T.P.22が現道に分断されているが、北側には本調査を実施したⅤ区に隣接していることからⅤ区の延長を想起させた。

これ以外では表面採集によって8-6の厨子甕が得られているいわゆるマンガン掛の厨子甕で

胴部に波状文を三条廻らせるもので、時代的には近代に該当する。比較的新しい年代の遺物と考えられる。これは調査当初に採集された遺物で、発見当初はハラクブの崖斜面一帯に墓が分布していることを想定し、墓の発見を予測して踏査を行ったが発見には至らなかった。採集された遺物の観察については第22表に示している。

参考文献

松川章・ほか 1986年『今帰仁城跡周辺遺跡範囲確認調査報告書』今帰仁村文化財調査報告書第12集 今帰仁村教育委員会



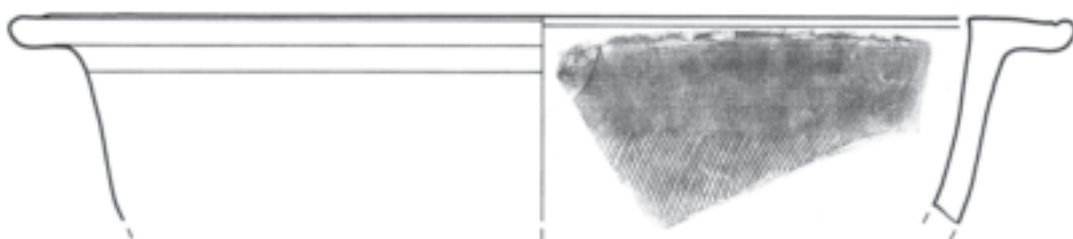
第7図 試掘調査箇所位置図



8-1



8-2



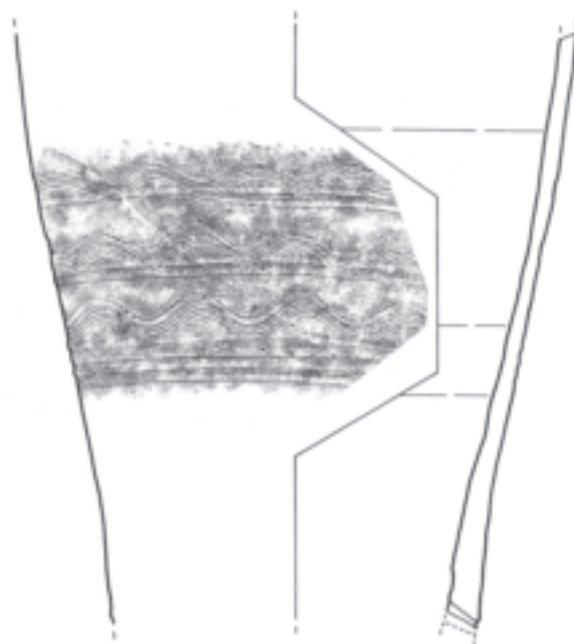
8-3



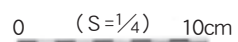
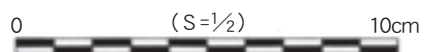
8-4



8-5



8-6



第8図 試掘調査出土遺物

第2節 地区割について

本遺跡はグスク時代に形成された集落跡で、今帰仁グスクの城下に展開する遺跡である。遺跡の立地する一帯は緩斜面といっても単純に緩やかな傾斜地となるわけではなく、起伏に富んだ凹凸のある岩盤といくつかの平坦面からなっている。このような現況は調査地点となった西区に限られた特徴ではなく、東区あるいは志慶真ムラ跡の比定地として指摘される今帰仁城跡南側一帯（志慶真門より南側の斜面地）についても同様の特徴を指摘することができる。西区のこのような平坦面を先の報告書（松川1986）ではⅠ区からⅤ区に小区画を設定し報告している。本調査でもこれに沿った形でⅠからⅤの地区設定を先ず設けた。地区設定の概況は第7、9図に示したとおりである。一方各地区を地形と地積によって幾つかの小グループに細分した。細分はⅠ区a・bのようにアルファベットを付した。

他方、調査にあたっては東側地区あるいは今帰仁城跡も含めて、今回の緊急発掘だけに限らず、今後継続して発掘調査を行うことが想定される。このため、今帰仁城跡周辺遺跡全体をカバーするような、国土座標系に基づいたグリッド設定を併用した。即ち国土座標第15系（平成14年4月1日に施行された改正測量法に基づく）のX=76,800をM、76,790をN、以下南へ10m毎にO・P・Q・・・と英数字を振り、Z以降については、AA・AB・AC・・・として表記した。Y軸は、Y=42,500を原点10とし、10m毎に東へ11・12・13・・・として算数字を振り、その組み合わせによってM-10（X=76,800-Y=42,500）、AG-20（X=76,600-Y=42,600）のように呼称し、交点の杭はそれぞれ北西のグリッド区画を指示することとした。なお、調査区の設定や個々の遺物の取り上げについても国土座標系で取り上げ、各調査次毎にファイルを作成して整理した。このため調査連番によって2～11次、地形現況に沿って東区のⅠ～Ⅴ区やハラクブ地区などの地区、更に座標系に基づいたグリッドが併記されることとなった。

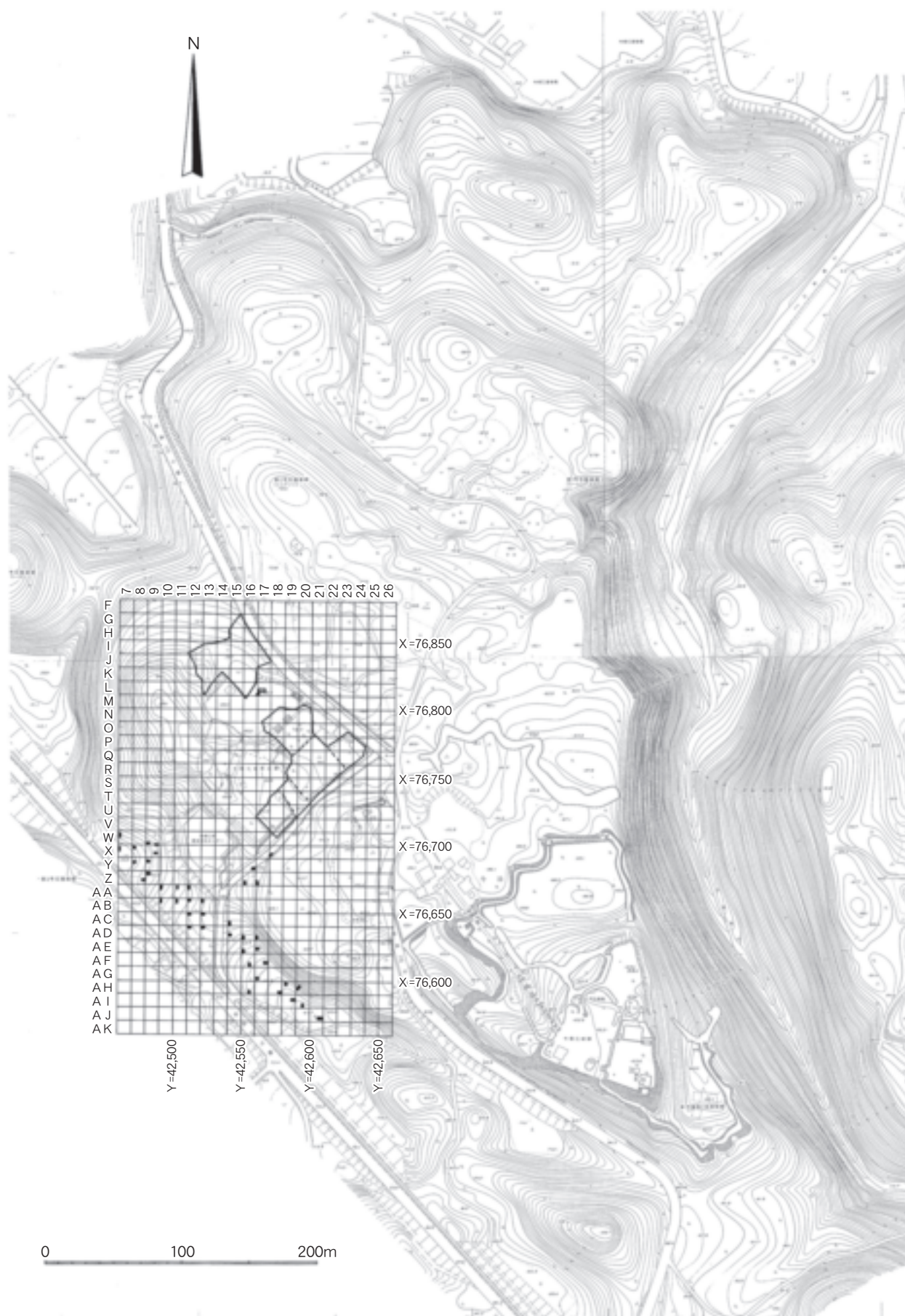
遺物の整理に関しては上述の地形的な地区と国土座標系に従った方形区画及び何次調査かを併記して、例えば「5次 V区 U-17」のように注記した。

調査 No.	地区	グリッド
--------	----	------

その一方で調査が進むにつれて、遺構の平面分布と地表面で観察した地区割りに齟齬が生じこれを整理する必要に迫られた。このため報告にあたっては遺構の検出状況に着眼し発掘調査の成果を踏まえた上で、遺構の集中するところと、岩盤の露頭するところを改めて一つのユニットとして捉えた。特に遺構の分布が集中する箇所を中心としたユニットを屋敷地と比定し、屋敷地1～4の4つのまとまりに整理している。実際には屋敷地1が2次調査Ⅱ区b、10次調査Ⅱaの資料を、屋敷地2が9次調査Ⅲ区b、屋敷地3が6次調査Ⅲ区cと8次調査Ⅲ区a及び11次調査Ⅲ区a、屋敷地4が5次調査Ⅴ区の資料に相当する。またこれらの屋敷地以外に該当する岩盤が露頭する地区については、岩盤露頭地域やその他としていくつかのまとまりあるグリッド毎に分割して紹介する。具体的には2次調査のⅠ区a b、2次調査のⅡ区（J-12・13、K-12・13）検出のSL2とした道跡、5・6・7次調査のⅣ区（注：6次調査Ⅳ区は旧称Ⅲ区d）、3次調査のハラクブ地区の一部が該当する。これらの屋敷地以外の岩盤露頭地区についてはその他（第Ⅴ章第5節）の項目で紹介する。

参考文献

松川章・ほか 1986年『今帰仁城跡周辺遺跡範囲確認調査報告書』今帰仁村文化財調査報告書第12集 今帰仁村教育委員会



第9図 調査グリッド設定図

第3節 層序

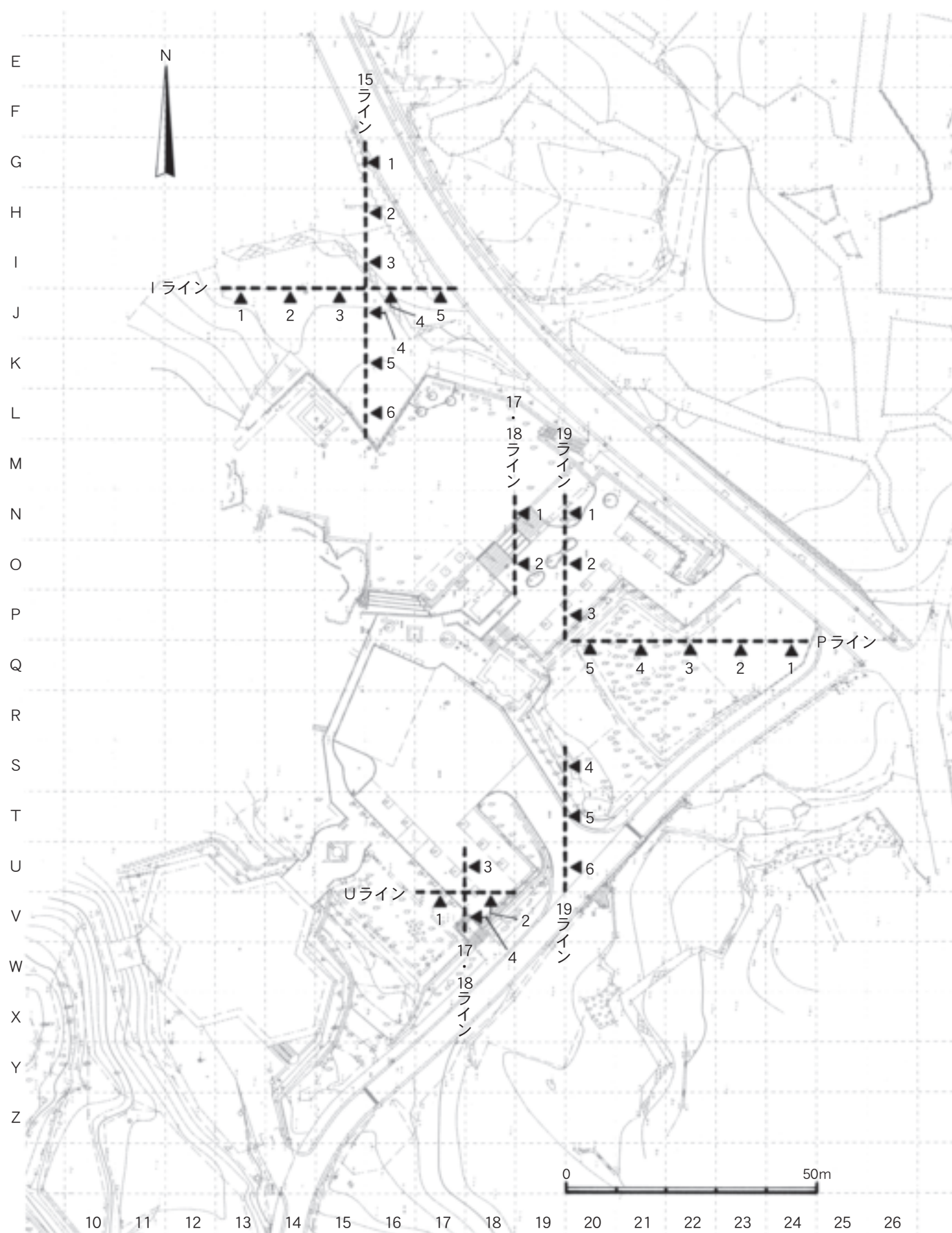
調査区内の層序は大きく分けて、最下部の地山・岩盤、下位の遺物を若干含んだ漸次的な自然堆積層もしくは造成層、両者の上層に堆積する中位の遺物包含層とこれを覆う最上層の旧表土・客土層からなる（第11図）。本節では都合これを地山、下層、中層（遺物包含層）、上層として区分するが報告では調査時の取り上げナンバー（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・・・）を付している。地山は調査範囲全域に共通する層であるが、基盤岩である石灰岩に包含層や旧表土が被覆するか、被覆しないのかは後述する屋敷地の想定や地区割りの大きな要素となっている。他方、調査地各所で遺物包含層とした黒褐色土層はグスク時代の遺物のみで構成され、プライマリーな堆積層と目される。各調査次毎に分層したためそれぞれ2・5次のⅢ層と6～11次のⅡ層が同じ層となっている。このため本節では便宜上中層として報告する。また、これらの下位、地山の上位には層相の異なる褐色砂礫層が堆積しておりこれを下層として整理した。Ⅲ区a、Ⅴ区の両地区で最も顕著に認められる層は、Ⅴ区調査時には遺物包含層として扱い、層相の異なる三枚に分層した。いわゆる整地層とも考えられたが、確認された層は自然堆積層として地山への移行層と理解した。今回の報告分の調査区では今帰仁城跡の調査で確認されるような、造成層、整地層などは検出されなかった。このため大規模造成による整地を行い屋敷地とするような状況にない。おそらくは、周辺地域の開発によって樹木が伐木され開墾が進み、屋敷地として適地である緩斜面、平坦地が生成され、屋敷として選択されていったのではないかと考えられる。各調査地区での取り上げ時の注記と本項において統一した層名は下表のとおりである。特に断りのない場合は報告では調査時の層名によって報告しているので注意されたい。

上層：昭和になって実施された開発等による客土層。または、大規模な開発造成が未着手で腐植土からなる表土層。更に遺跡全体にわたって認められた耕作土層も上層として整理する。これは調査地のほぼ全域が耕地であったために形成された層である。耕耘が繰り返されるため地下深くに耕耘が及ぶ地域では下位の中層（遺物包含層）や地山を掘削し攪乱坑となっている箇所も少なくなかった。時期的には近年まで耕耘が繰り返されていたと考えられガラスビンや近現代の陶磁器等を包蔵する。

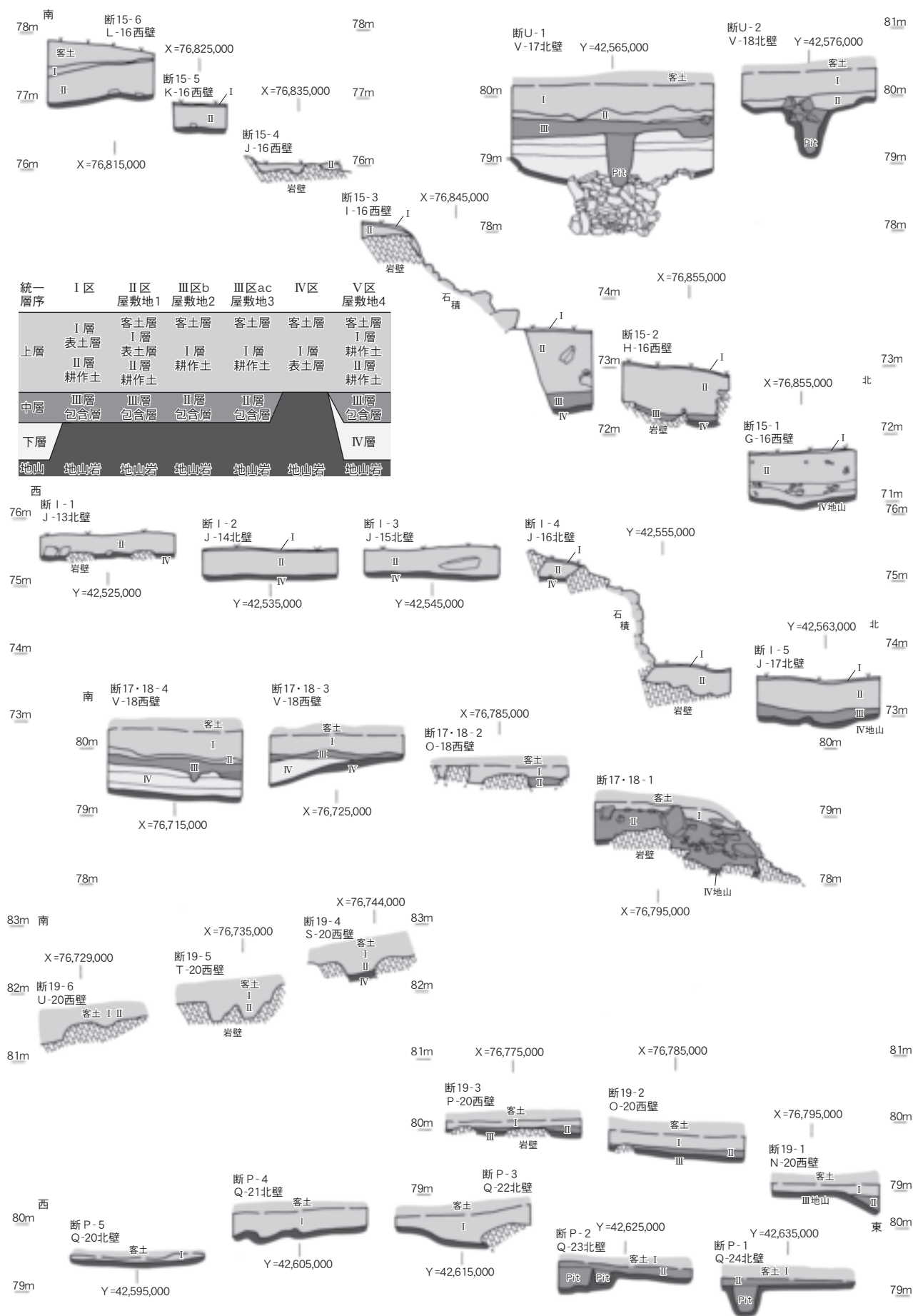
中層：遺物を包蔵する遺物包含層で出土遺物からグスク時代に限定することができる。暗褐色もしくは黒褐色の土層となる。

下層：地山への移行層で希にⅠ区やⅡ区の一部地域で認められた。岩盤を埋めるように堆積すること、互層となる箇所が認められることなどから調査当初（2次調査）は造成層と考えていたがこれを確定的に判別できる事例が無かった。この他にもⅤ区で明瞭に認められた、包含層から地山への移行層では粘性は無く1cm大の砂利を含む褐色土層で、包含層と近い土色ではあった。

地山：基盤層で明るい赤褐色の土層である。また地山を更に掘り下げると一帯は古生代石灰岩を基盤岩とする。石灰岩の岩盤は至る所で露頭している。例えば屋敷地3と4の境界であるⅣ区は南北に連なる尾根線となり北西には小高い丘を作っていて、現在でも自然林を残し集落開拓以前の自然林の様子を見ることができる。



第10図 断面模式図位置図



第11图 柱状图

第4節 遺物の分類

中国陶磁

1. 青磁

(1) 碗

①劃花文碗 (第12図-1)

内体面に片切彫りによる蓮花文が描かれている。内底にも蓮花文などの文様があるのと無いのがある。なお、内体面に2本沈線によって5分割し、その中に飛雲文を描いたのは主郭の第9層、第7層で1点ずつ検出されているが、今回の資料には見当たらない。

②鎬蓮弁文碗 (第12図-2)

外体面に鎬の蓮弁を廻らすタイプで、疊付が平坦で疊付から外底は露胎。aは主郭第9層、第7層で多く検出されている。bは鎬蓮弁の弁幅が細く、疊付は細く尖っており、疊付だけは露胎である。主郭第9層で2点、第7層で1点出土している。横田・森田編年(森田・横田1978)ではaはⅠ-5、bはⅢ-2に相当する。

③無鎬蓮弁文碗Ⅰ (第12図-3)

④無鎬蓮弁文碗Ⅱ・Ⅲ (第12図-4)

外体面に鎬のない蓮弁を廻らすタイプで、3類に大別される。Ⅰ類は鎬蓮弁文碗と同じように直口碗で、文様によってa・b・cに分けた。Ⅱ類は外反する碗で、内体面に刻花文が描かれている(d)。Ⅲ類は内体面に型押しによる蓮弁文が廻っている(e)。

⑤刻花文碗 (第12図-5)

外反タイプの碗で、内・外面に篋描きの花文が見られる。aは刻花十雷文、bは刻花のみである。bは首里城京の内跡で数点報告されている(金城・ほか1998)。

⑥細蓮弁文碗 (第12図-6)

線描きによる蓮弁文が外体面に描かれた直口碗である。細蓮弁の描き方によって3類に分けた。aは弁先が丁寧描かれ、弁尻は高

台際まで延びている。bは弁先の描き方がaに比して崩れ、弁尻は高台際まで延びず、高台脇で止まっている。cは弁先はかなり崩れていると消滅しており、弁尻は高台脇まで延びず、腰部か胴部で止まっている。なお、この分類については今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰを参照(金武・宮里1983)。

⑦無文外反碗 (第12図-7)

無文外反碗はA窯系とB窯系がある。A窯系は素地が白色系で、大振り厚手の碗。外底は露胎(a)。B窯系は素地が灰色系で、大振り薄手の碗。疊付から外底までは露胎(b)。この分類についても今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰを参照。

⑧玉縁状口縁碗 (第12図-8)

口縁部が玉縁状に肥厚する大振りの碗である。いわゆる佐敷タイプである。佐敷グスクの報告書(當眞・ほか1980)で16点の計測表と7点の実測図が報告されている。今帰仁城跡では志慶真門郭で2点報告されている。ほかには銘苅原遺跡で6点報告されている(金武・ほか1997)。

⑨雷文帯碗 (第12図-9)

すべて直口碗で2類に分けた。aは篋描きの雷文帯で、bは印花の雷文帯である。最も大量に出土しているのは首里城京の内跡で44点実測図が報告されている。

⑩型押文碗 (第12図-10)

内体面に型造りによる型押文が見られる碗で、人形手タイプと考えられる。

⑪唐草刻文碗 (第12図-11)

内外面とも2本の界線を廻らして上位と下位に文様帯を分けている。外面上位に蔓唐草文が廻り、下位にも唐草文が描かれていたと考えられる。内面上位には線描きの四方禪文

が廻っている。このような文様の青磁器は沖縄では初めての出土品である。本品と文様構成が同じ碗が『龍泉窯青瓷』に報告されている（朱1998）。ただ器形が本品は直口であるに対して外反碗である。

⑫波状文碗（第12図-12）

直口碗で外面上位に3～4本櫛による波状文が廻る碗である。この種の青磁碗も出土例が少ない。主郭第Ⅰ～Ⅳ層出土として1点報告されている（金武・宮里1991）。

⑬青緑釉無文碗（第12図-13）

薄手の外反碗で、焼成が弱い。外面上位から内底までは薄い青緑釉が施釉されている。一応青磁の項に入れて報告する。主郭の報告書でタイ産かとして報告したタイプで、屋良グスクでは泉州窯系と報告されている（金城・ほか1994）。

（2）皿

①櫛描文皿（第13図-1）

内底に櫛によるジグザグ文が描かれた腰折皿である。底はベタ底で同安窯系と呼ばれているタイプである。この種の皿には無文のものも見られる。主郭第9層、第7層では有文と無文が検出されている。

②蓮弁口折皿（第13図-2）

蓮弁口折皿はa～dの4タイプが検出された。口折皿a・bと共伴する無文のものもあるが、今回は検出されていない。主郭第7層や志慶真門郭では検出されている。

口折皿aは内体面に幅広の単篋で蓮弁文を廻らす。口折の先端をつまみ上げるタイプ。

口折皿bは外体面に鎬蓮弁文を廻らす。

口折皿cは外体面に無鎬蓮弁文が廻されている。

口折皿dは外体面の無鎬蓮弁文が大きく簡略化したタイプ。

③蓮弁直口皿（第13図-3）

内体面に篋描きの蓮弁を廻らすのと、内外面に蓮弁を廻らし、口縁部を輪花にする菊皿

がある。なお、内底に双魚文の印刻されているのも見られる。

④無文直口皿（第13図-4）

内、外面に文様が描かれてない無文で、口縁はやや内向する。底部には高台が付く。

⑤無文外反皿（第13図-5）

腰折皿にはならない腰部が丸味をもつ皿。底部には高台が付く。

⑥腰折皿（第13図-6）

腰折皿は4タイプに分けた。aは内外面に蓮弁文を廻らすもの。bは内外面に唐草文を廻らす。cは口縁部を輪花にするいわゆる稜花皿である。dは無文である。

（3）盤（第13図-7）

鐳縁の盤で、内体面に蓮弁文のあるもの（a～e）と篋描きの唐草文のあるもの（f）に大別される。そして蓮弁のあるものをつぎのように分類する。

①Ⅰ群（第13図-7a・b）－内体面に幅広の篋で1本1本描かれているもの。

I a 鐳は平坦で、鐳端が稜花（a）。

I b 鐳端をつまみ上げる（b）。

②Ⅱ群（第13図-7c～e）－内体面に2本以上の櫛目による蓮弁文。

Ⅱ a 内体面に2本櫛で描かれているもの（c）。

Ⅱ b 内体面に3本櫛で描かれているもの（d）。

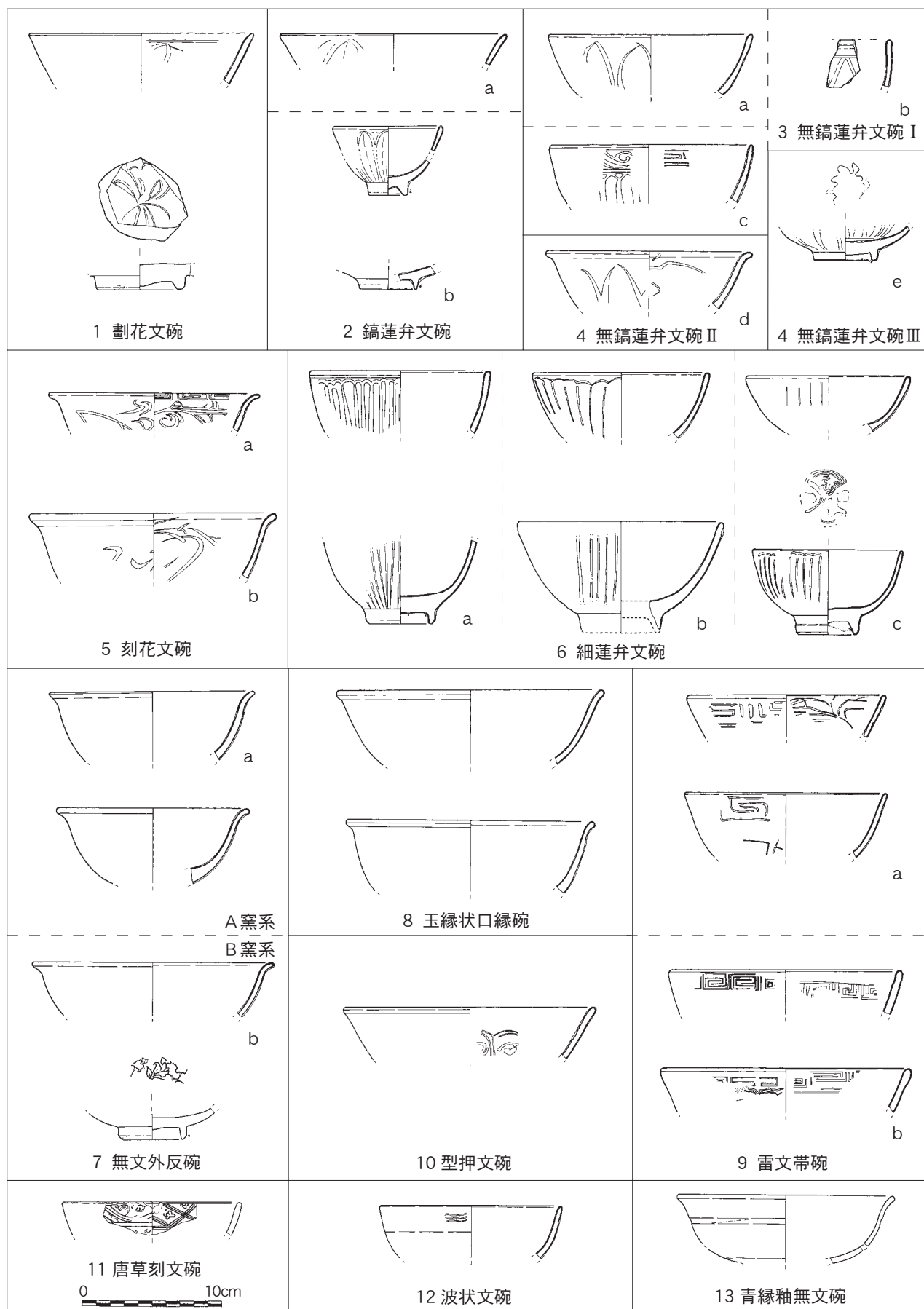
Ⅱ c 内体面に5本櫛で描かれているもの（e）。

（4）杯（第14図-1）

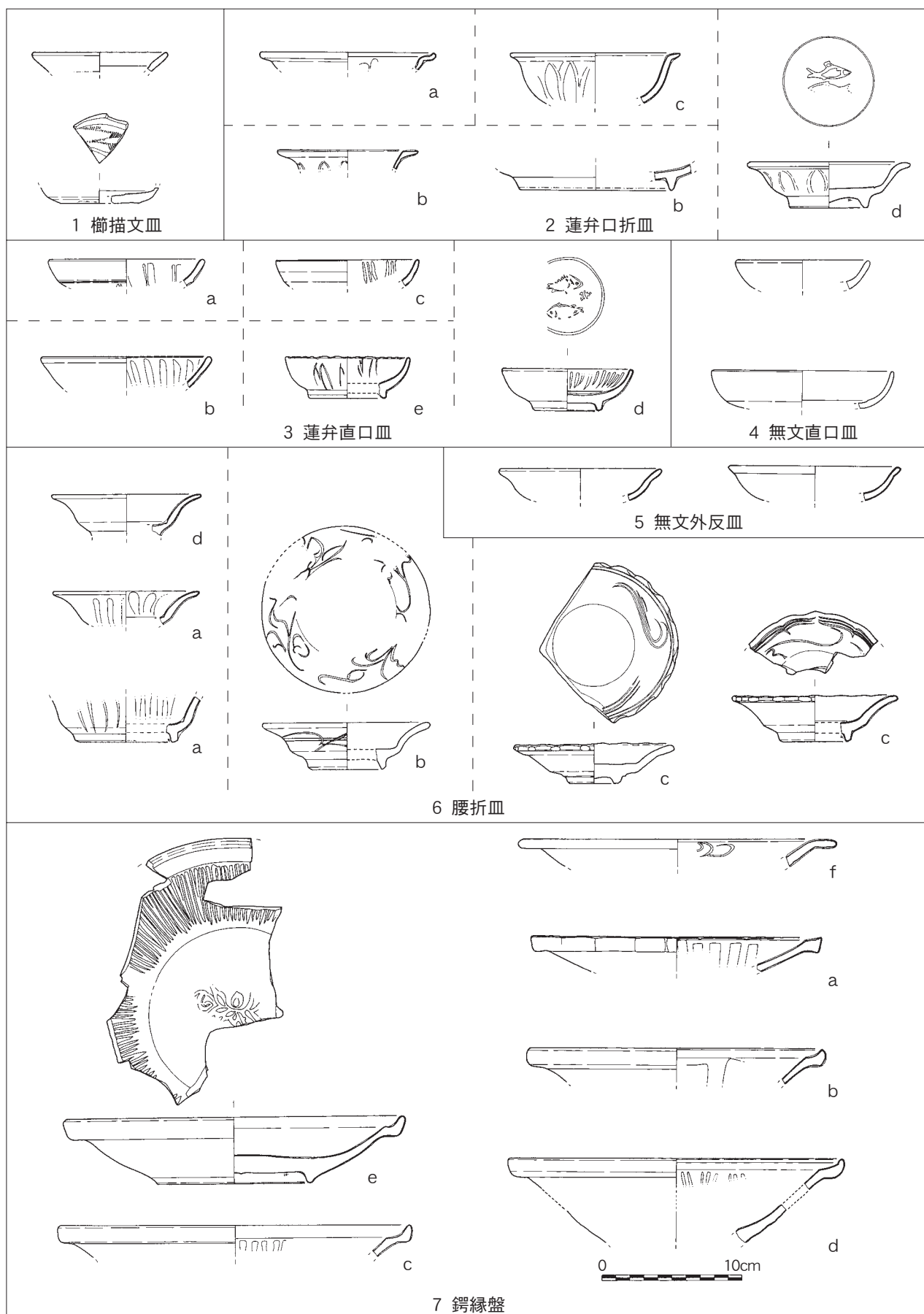
杯は高足杯いわゆる馬上杯（a）と碁笥底杯（b）が検出されている。

（5）香炉（第14図-2）

弦文帯の香炉である。



第12図 青磁碗



第13図 青磁皿・盤

(6) 瓶 (第14図-3)

玉壺春タイプの瓶で、篋描きの唐草文が見られる。

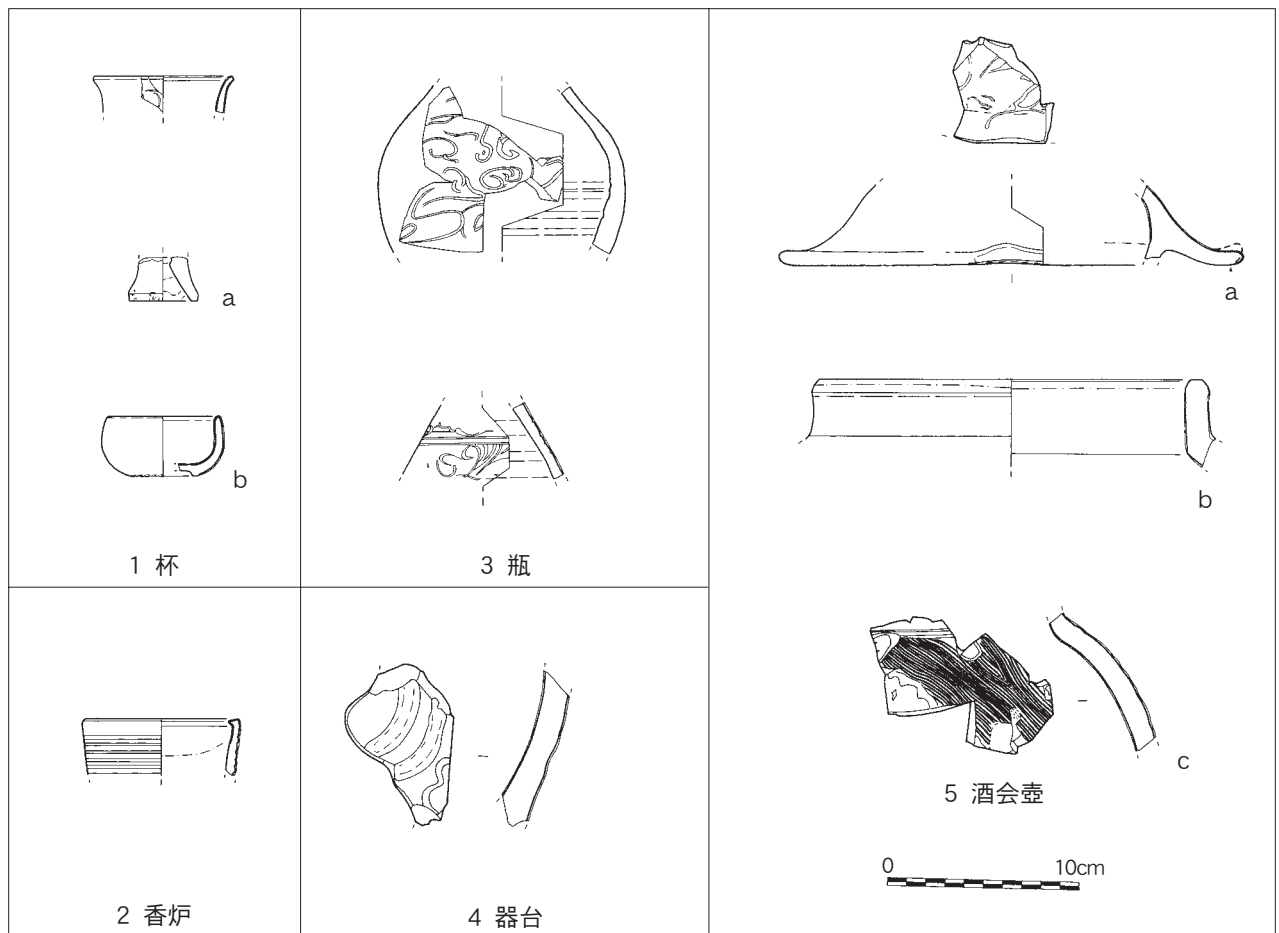
(7) 器台 (第14図-4)

器台の破片が検出されている。このタイプの器台は主郭出土で全形が窺える資料が報告

されている。

(8) 酒会壺 (第14図-5)

酒会壺の蓋と身が検出されている。aは蓋で蓋縁が波状になっている。bは身の口縁部で口縁は垂直に立ち上がるいわゆる甑口である。cは肩部で、刷毛目文が描かれている。



第14図 青磁杯・香炉・瓶・器台・酒会壺

2. 白磁

(1) 碗

①玉縁碗 (第15図-1)

玉縁碗は主郭や志慶真門郭では1点も出土していない陶磁器であり、周辺遺跡の研究に重要な資料である。小破片で口径も算出できないが、玉縁碗Ⅱ(金武1989)のタイプである。

②今帰仁タイプ (第15図-2)

今帰仁タイプ碗は主郭最下層(第9層)から出土する古いタイプの白磁碗で、第7層で最も多く出土している。この碗はビロースク遺跡や慶田崎遺跡などで若干出土しているが、今帰仁では大量に出土しており、しかも層的に年代が確認できる資料であり、今帰仁城跡を特徴づける重要な資料ということで今帰仁タイプと型式設定されている。その特徴は高台がハの字状に広がり、畳付内端のみが畳につく。全体的に薄手で施釉法は高台をつかんで釉に突込んで施釉している。そのために胴部下位から高台にかけて露胎である。内底は露胎のものと、釉を蛇の目状に掻き取って露胎している。

③ビロースクタイプ (第15図-3)

ビロースクタイプ碗は主郭第7層と第5層で多く検出された。ビロースクタイプとはビロースク遺跡でまとまって出土し、ビロースクタイプ碗と型式設定されている(金武1998)。主郭第7層や第5層で多く検出されたことで年代が層で確認された標式資料である。この碗は内面に1本の圈線と櫛描文とが描かれている碗Ⅰ(a)と無文の碗Ⅱ(b)に大別される。

④型押外反碗 (第15図-4)

内面全体に型押文が見られる外反碗で、「枢府手」と呼ばれているタイプに属すると考えられる。志慶真門郭では碗全体が復元されている。内面の文様は2段に描かれた蓮弁と菊花文が描かれている。

⑤無文外反碗 (第15図-5)

この無文外反碗は素地、施釉法、高台造りなどビロースクタイプ碗Ⅱに類する。そのことから田中克子はビロースクⅢ類としている(田中・森本2004)。ビロースクタイプ碗Ⅱと大きく異なる点は口縁部が外反することと、内底が広がって、そこに印花花文が入ることである。この無文外反碗は沖縄の多くのグスクで大量に出土する碗で、グスクを代表する白磁碗である。主郭の第5層から出土しはじめることから、層で年代が確認できる資料である。

⑥無文直口碗 (第15図-6)

主郭の第2層、第1層で多く出土する碗である。内底は露胎が多く、そこにはスタンプ字が見られるのが多い。第15図-6は「得」の字が見られるが、主郭では「得」と「堂」が報告されている。

(2) 皿

①口禿皿 (第15図-7)

いわゆる口禿になる皿で、伏せ焼の焼成法で焼成されるタイプである。主郭第7層からは碗と皿が多く出土している古いタイプである。碗には高台が付くが、皿の場合はベタ底である。

②直口皿 (第15図-8)

直口皿には高台を挟むいわゆる挟入皿(a)と挟めない皿(b)がある。

③外反皿 (第15図-9)

外反皿は畳付が円味をもち、腰部が少し膨らんでから口縁へ外反するタイプ(a)と畳付が尖って、高台から口縁へ外反するタイプ(b)がある。

④燈明皿 (第15図-10)

内面に薄い白磁釉が施釉されているが、口唇部から外底までは露胎の直口皿である。口唇部が露胎のため、燈明皿として使用したときの煤が付着している。主郭では50点ぐらい検出されている。

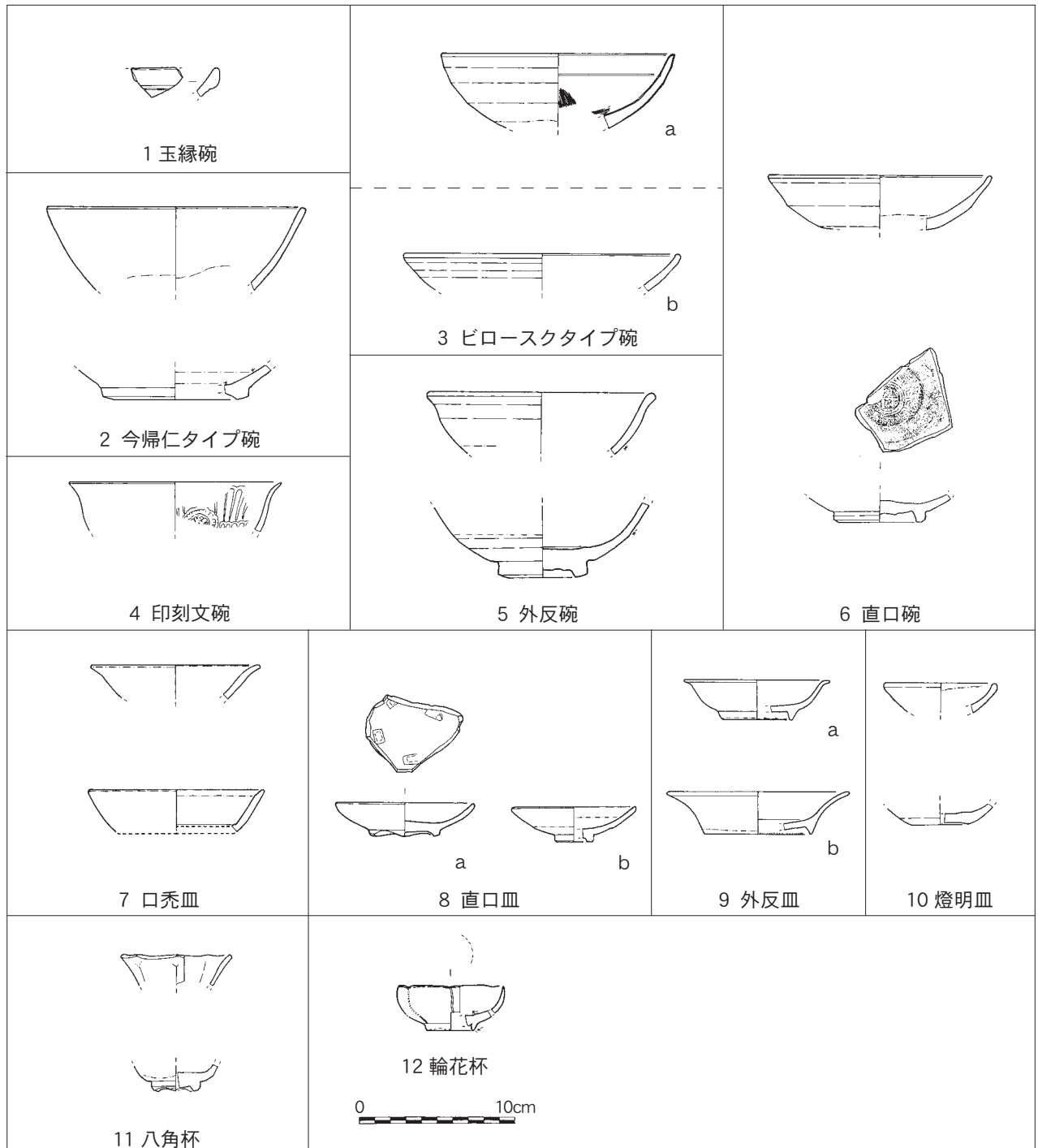
(3) 杯

①八角杯 (第15図-11)

八角形に面取りされた腰折の杯である。この八角杯の高台は挟入高台が多いが、挟の入らない高台も志慶真門郭では2個報告されている。

②輪花杯 (第15図-12)

口縁部が輪花となる小杯である。口縁の輪花の挟部に沿って外体面にも縦の凹みが入り、器全体が蓮花状である。



第15図 白磁

3. 青花

(1) 元様式青花壺もしくは香炉 (第16図-1)

盤口(驢蹄口)の壺と考えられる。盤口外面に発色の良いコバルトで亀甲繫文が廻っている。これと類似の資料が志慶真門郭で検出されている。盤口に亀甲繫文の類例は酒会壺では大英博物館蔵(矢部1974)に、香炉では中国故宮博物館蔵(佐藤1981)にみることができる。よって壺もしくは香炉とした。

(2) 元様式青花盤 (第16図-2・3)

第16図-2は盤の胴部で外面にラム式蓮弁文、内面に唐草文が描かれている。3は盤の底部で、内底に蓮池漁藻図の藻の一部が見られる。

(3) 明代青花碗

①外反碗 (第16図-4)

aは底部破片で、内底に宝相華唐草文が描かれている。外面の高台脇に唐草文の一部が見られる。bは発色の良いコバルトで外面上位に波濤文、その下に唐草文が描かれている。また、内面にも唐草文が描かれている。cは内底に梅花と上弦の月を組み合わせた月梅図が描かれている。月梅図は15世紀前半によく用いられたモチーフのようで『明の染付』に碗や馬上杯が紹介されている(藤岡1975)。

②口折碗 (第16図-5)

口縁部が鐔状に折れるタイプである。高台は「ハ」の字状に開き、外面には馬士文と如意雲文が描かれている特徴的な青花碗である。このタイプの青花碗は主郭や志慶真門郭でも出土している。この青花碗は現在のところ今帰仁城跡以外の遺跡では出土報告が見られないことから、「今帰仁タイプ青花口折碗」と仮称しておく。

③直口碗 (第16図-6)

aは外面に波濤文、その下に蕉葉文が廻る蓮子タイプの碗である。bはaと類似するタ

イプであるが、波濤文のみが見られる。cは外面下位にアラベスク文、内底に十字花文が見られる蓮子タイプである。dは外面に唐草文、内底に菊花文のある饅頭心タイプである。

(4) 明代青花皿

④外反皿 (第15図-7)

aは内底に十字花文、外面に唐草文が描かれているタイプである。bは内底に玉取獅子、外面に宝相華唐草文が描かれるタイプである。bは主郭、志慶真門郭でも出土している。

⑤碁笥底皿 (第15図-8)

aは外面に蕉葉文、内底に捻じ花や草花文が描かれる直口皿タイプである。bは外面下位に唐草文、内底に草花文が描かれる直口皿タイプである。

⑥不明皿 (第16図-9)

畳付だけ露胎の皿で内底に蛙の文様が見られるが、類似が確認できないので、今後の資料を待ちたい。清代の可能性がある。

⑦大皿 (第16図-10)

aは内・外面に宝相華唐草文が描かれている。この大皿と器形、文様が類似の資料が志慶真門郭で出土している。bは高台外面に如意頭繫文が廻り、胴部外面には篋描の蓮弁文の一部が見られる。本品と類似資料が主郭で出土している。その資料は全形が窺える資料で、口縁部は鐔縁状に折れる。

⑧直口杯 (第16図-11)

aは胴部に1本の凸帯が廻り、その上位に蔓唐草文が描かれている。bは外面に渦巻き文が見られる。cは外面に如意頭繫文が廻っている。a・b・cとも志慶真門郭出土品に類例が見られる。

⑨小杯 (第16図-12)

口径が5cm前後の小杯である。外面に草花文の一部が見られる。類似の資料は主郭で報告されている。



第16図 遺物分類図（青花）

4. 天目茶碗（第17図-1）

a は一般的な天目茶碗の高台破片である。
b は高台の内割りのない底部で、主郭で一点出土している。

5. 褐釉陶器

①大海茶入（第17図-2）

大海茶入の口縁部である。全形が窺えるのは主郭やピロースク遺跡で報告されている。特に主郭では第7層のプライマリーな層で検出されており、沖縄の出土例では最も古い。

②急須（第17図-3）

a は蓋、b は身の口縁部、c は注口部である。身はやや荒い素地であるが、貼付された注口は水簾された微粒素地である。急須の資料としては主郭で1点報告されている。

③長胴四耳壺（第17図-4）

口縁部の形に特徴のある壺である。素地は水簾されて微粒である。この長胴壺の胴部から底部まである資料が主郭第5層で出土しており、現在のところ沖縄での上限資料である。口縁部では類似の資料が首里城京の内跡で出土している。全形の窺える資料としては新安海底遺跡（1983）と鷹島海底遺跡（2001）で報告されている。なお、生産地と年代については森達也の「褐釉長胴四耳壺の生産地と年代について」の論文（森2001）がある。

④壺（第17図-5）

a は①の大海茶入と類似の素地で、やや粗い灰褐色である。ロクロの痕が目立つが、全体として均整のとれた壺である。b は口縁部が丸く肥厚する壺。c は口唇部が平坦である。d は口縁部が方形に肥厚する大型壺である。

⑤深鉢（第17図-6）

a は口縁部が丸く肥厚する深鉢で、b は口唇部が平坦になる深鉢である。

⑥播鉢（第17図-7）

口縁部が折れ曲がる特徴を持つ播鉢である。上部破片のため播目は残っていないが、器形的特徴から播鉢である。天界寺跡（島・ほか2000）や銘苅原遺跡では播目まで残っている資料が報告されている。

⑦花鉢（第17図-8）

花鉢の口縁部資料で、口縁外面に波状の貼付文が廻って鐔状を呈している。波状貼付文だけでみると新安海底遺跡出土の花盆に類似している。

6. 白濁釉小型壺（第17図-9）

a・bともやや粗い素地の陶器である。釉は白濁釉を口縁部から外面に施釉されている。a は肥厚口縁で口径が広いが、b は肥厚口縁ではなく、口径が小さい小型壺である。

7. 五彩碗（第17図-10）

外反碗の口縁部で白磁釉の上に花唐草文が描かれている。二度焼のため退色しているが、それでも緑色の丸葉とその輪郭に赤色が残っている。この五彩碗と同類が主郭で出土しており、大振りなので鉢として報告されている。

8. 瑠璃釉

（1）碗（第17図-11）

口縁部と高台が検出された。外面は瑠璃釉である。小破片のため図上復元はできないが、同類のものが主郭で図上復元されている。内面と外底は白磁釉である。

（2）瓶（第17図-12）

瑠璃釉瓶の胴部である。外面は瑠璃釉で、内面は白磁釉である。主郭では瑠璃釉玉壺春瓶が図上復元されているが、その資料に類似すると考える。

9. 翡翠釉

(1) 瓶 (第17図-13)

翡翠釉瓶の頸部破片である。白磁釉の上に翡翠釉を施釉しているので釉が剥落している部分が見られる。

(2) 皿 (第17図-14)

外反皿の口縁部と高台である。上記瓶と同じように施釉しているので、釉の剥落がみられる。翡翠釉の皿は主郭、志慶真門郭でも出土し、全形のわかる資料が報告されている。

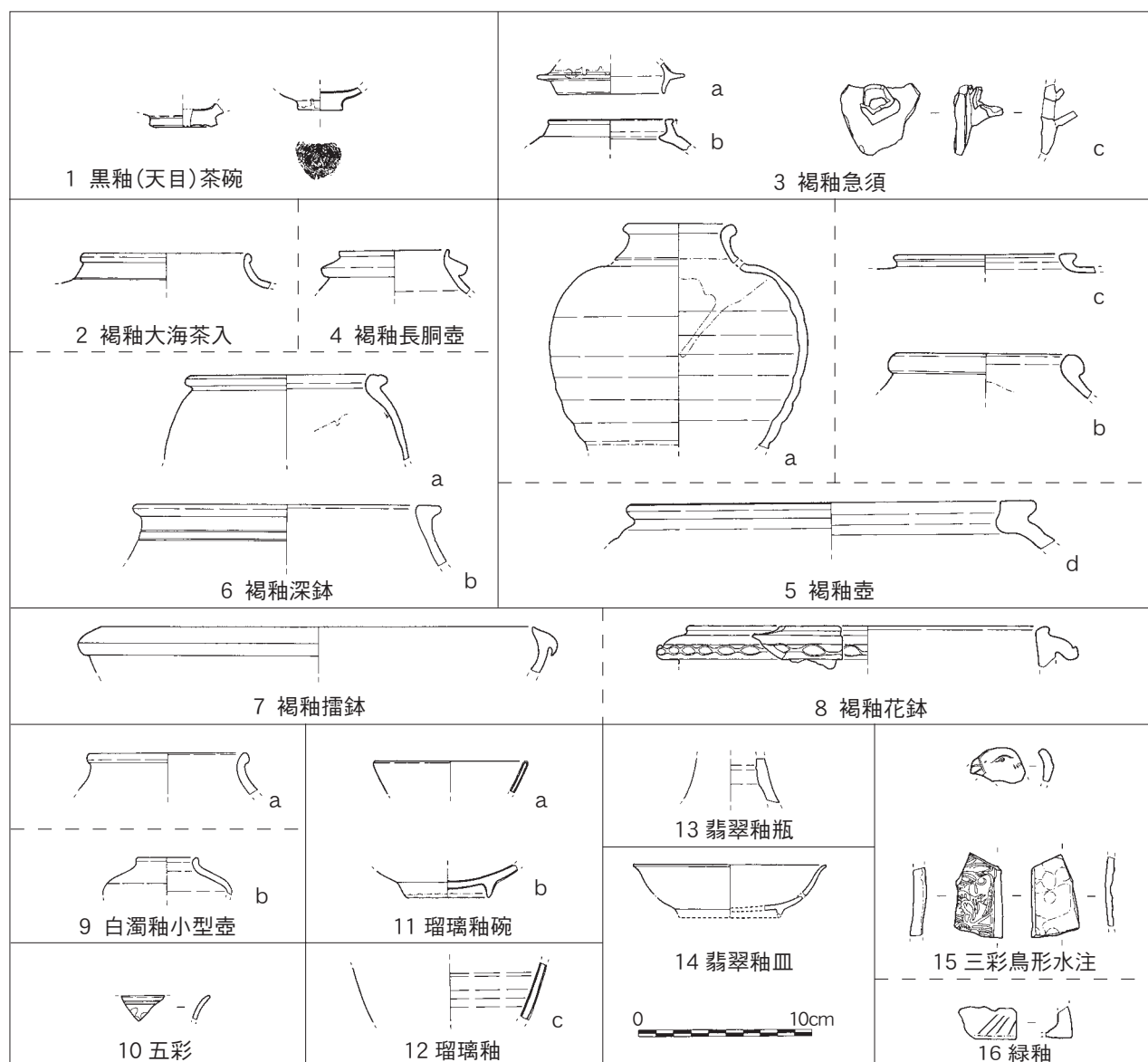
10. 三彩

(1) 鳥形水注 (第17図-15)

aは鳥形水注の頭部、bは胴部破片である。小破片のため図上復元はできないが、主郭では図上復元したのが報告されている。

11. 緑釉 (第17図-16)

外面に緑釉がかかっている。内面にはロクロ痕ではなく、手造りの指頭痕が残っていることから瓶や壺などではなく、上記三彩水注のような器形と考えられる。



第17図 黒釉・褐釉・その他

タイ陶磁

1. 半練（土器）

（1）蓋（第18図-1）

半練の落とし蓋である。

（2）壺（第18図-2）

半練の壺で、タイでは上記蓋とセットで土鍋として使用されたと言われている。天界寺跡や銘苅原遺跡、我謝遺跡（大城・ほか1983）などで出土している。

その蓋として前記の半練（土器）蓋が使われたと考えられている（金武1991）。主郭や首里城京の内跡では大型四耳壺と半練蓋がほぼ同数出土している。

（2）中型長胴四耳壺（第18図-4）

この壺と同タイプの資料が主郭で出土している。その資料は口縁部から底部まで全形が残っている好資料である。

2. 褐釉陶器

（1）大型四耳壺（第18図-3）

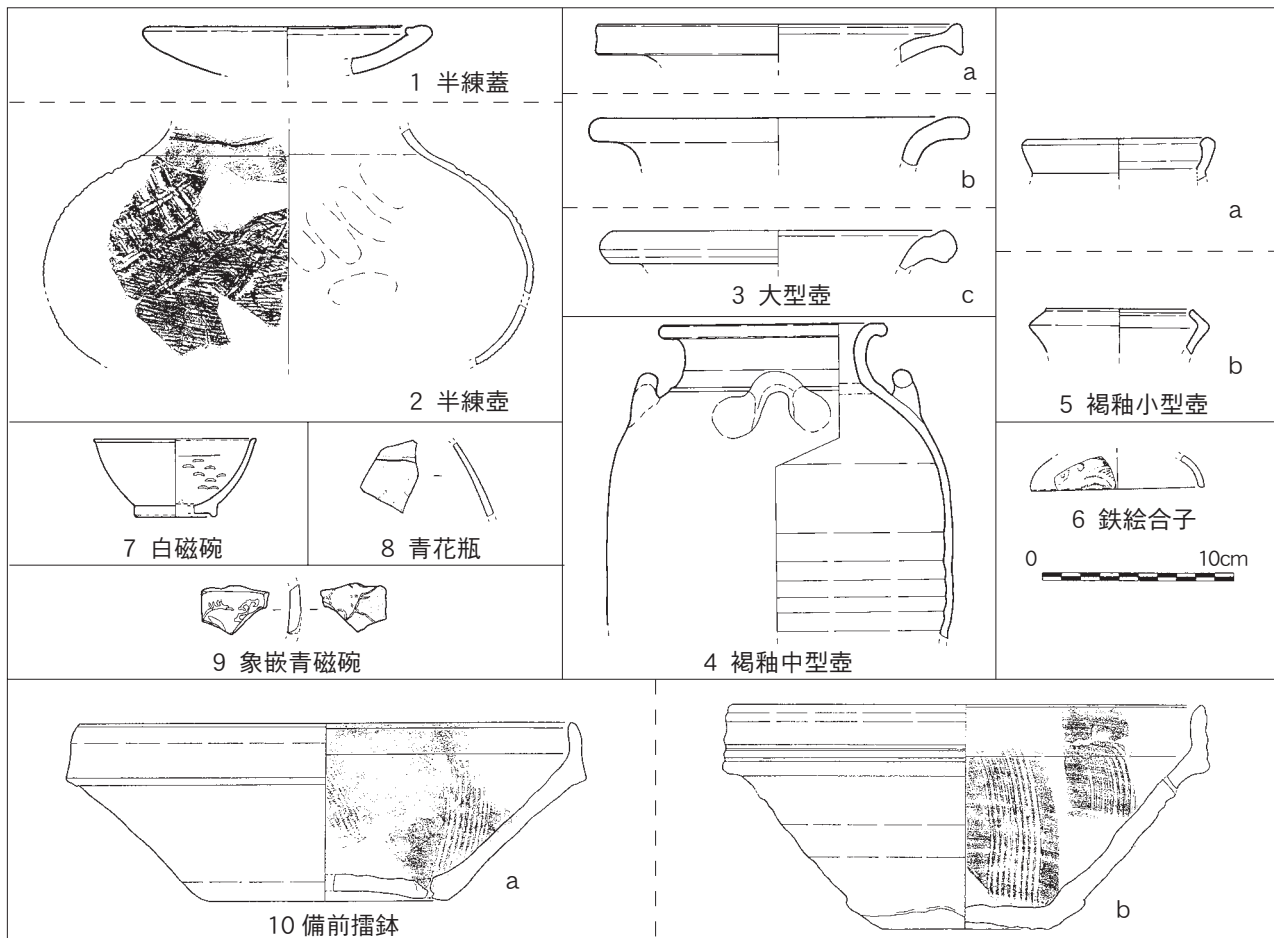
aは口縁部が三角形状に肥厚し、朝顔状に大きく開く。bは僅かに丸く肥厚し、aのように大きく開かない。cは丸く大きく肥厚し口縁上位に凹帯が廻る。口縁の開きは大きくなく、bと類似する。これらの大型四耳壺はタイから酒入りのコンテナとして、使用され、

（3）小型長胴壺（第18図-5）

a、bとも口縁部に特徴のある資料である。類例としては博多遺跡出土のサワンカローク黒褐釉双耳壺（有島1991）がある。

3. 鉄絵合子（第18図-6）

鉄絵合子の蓋である。鉄絵合子は身も蓋も主郭で多く出土している。



第18図 タイ・ベトナム・韓国・備前

ベトナム陶磁

1. 白磁碗（第18図-7）

内面に型押による青海波紋が施文されている。口唇部は口禿で、外底も露胎である。この白磁碗は主郭で4個体報告されている。

2. 青花瓶（第18図-8）

瓶の肩部破片である。コバルトが僅かにみられる。青花瓶は主郭で報告されている。

韓国陶磁

1. 象嵌青磁碗（第18図-9）

白黒象嵌のある青磁碗の破片である。象嵌

青磁碗は主郭と志慶真門郭で出土しているが特に志慶真門郭の資料は全形が窺える。

備前焼陶器

1. 擂鉢（第18図-10）

aとbはタイプの異なる擂鉢である。aは

口縁部外面に凹帯が廻らないタイプで、bは4本の凹帯が廻っている。

引用・参考文献

- 有島美江 1991年「博多出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』No.11 日本貿易陶磁研究会
大城慧 1983年『我謝遺跡』西原町文化財調査報告書第5集 西原町教育委員会
小川光彦・ほか 2001年『鷹島海底遺跡Ⅴ』長崎県高島町教育委員会
金城亀信・ほか 1998年『首里城跡ー京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）ー』沖縄県文化財調査報告書第132集 沖縄県教育委員会
金城亀信・ほか 1994年『屋良グスク』嘉手納町文化財調査報告書第1集 嘉手納町教育委員会
金武正紀 1988年「ピロースクタイプの白磁碗について」『貿易陶磁研究』No.8 日本貿易陶磁研究会
金武正紀 1989年「沖縄における12・13世紀の中国陶磁器」『沖縄県立博物館紀要』第15号 沖縄県立博物館
金武正紀 1991年「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』No.11 日本貿易陶磁研究会
金武正紀・ほか 1997年『銘苅原遺跡』那覇市文化財調査報告書第35集 那覇市教育委員会
金武正紀・宮里末廣・ほか 1983年『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村文化財調査報告書第9集 今帰仁村教育委員会
金武正紀・宮里末廣・ほか 1991年『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第14集 今帰仁村教育委員会
佐藤雅彦 1981年「元の白磁と青花」『世界陶磁全集13』小学館
島弘・ほか 2000年『天界寺跡』那覇市文化財調査報告書第43集 那覇市教育委員会
田中克子・森本朝子 2004年「沖縄出土の貿易陶磁の問題点ー中国粗製白磁とベトナム初期貿易陶磁ー」『グスク文化を考える』新人物往来社
當眞嗣一・ほか 1980年『佐敷グスク』佐敷町教育委員会
藤岡了一 1975年『明の染付』陶磁大系42 平凡社
森田勉・横田賢次郎 1978年「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4
森達也 2001年「褐釉長胴四耳壺の生産地と年代について」『鷹島海底遺跡Ⅴ』高島町文化財調査報告書第4集 高島町教育委員会
矢部良明 1974年『元の染付』陶磁大系41 平凡社
朱伯謙・主編 1998年『龍泉窯青瓷』芸術家出版社（台北）
文化広報部文化財管理局編 1983年『新安海底遺物』同和出版公社（ソウル）

第5節 集計

1. 集計の前提

前述の分類に従って集計を行った。集計に際してはそれぞれの屋敷地、地区毎に実施したため遺構内のものは包含層のものに含め一括で集計を行っている。ただし、遺構内の各出土遺物については各遺構の報告（第Ⅴ章）でこれを紹介している。

今回行う今帰仁城跡周辺遺跡の出土遺物の量的な把握をするに際しては、今帰仁城跡の主郭や志慶真門郭との比較検討を行うことでその機能的な差違や階層などを復元することに有効な手段となると考える。しかし実際には出土量の多い陶磁器の統計処理は、個体数の算出方法がまちまちであることが多い。例えば破片数の計数にあたっては簡便であるため多くの調査報告書で採用されているが、当該遺跡の出土遺物は残りは良くないので、小破片が多く総量が多くなると考える。このため城内の遺物との数的比較を単純に行うことはできない。また、有効とされる口縁部計測法については「器種の組成をだす場合には個体識別法に近い精度を期待でき、また資料の個性や量に基づく誤差は最も少ない方法」とされるが「計量した絶対量が個体識別法による場合よりもかなり少なくなる」ケースもあるとする（宇野1992）。あくまでも、今後今帰仁城跡を含めた継続的な計量の方法を行う為には、遺跡から出土する陶磁器の組成のみでなく、量そのものにも着目することが重要であると考えた。このため、今回集計に採用した方法は個体識別法によって個体数を算出することとした。

2. 手順

今回は計数にあたっては次の手順を追うこととした。先ず陶磁器を器種・型式によって識別を行い分類した。破片資料は口縁部・胴部・底部に分類した。上記の手順によってそれぞれの分類毎の口縁部と底部の破片数を算出することができる。胴部の破片数は口縁部・底部の無いもののみ扱いそれ以外の集計は割愛した。次に口縁部と底部について個体識別法によって個体数を算出、口縁部と底部でそれぞれ個体を算出した。型式分類は口縁部と底部で一致するが、破片が小さいものは分類困難で、幾つかの分類を横断するような形で算出されたものも少なくない。例えば、口縁部であればその特徴によって細緻に型式を判別することが可能であるが、底部においては型式判別が口縁部よりも困難で、口縁部で分類した幾つかの型式を包括するケースもある。このため型式分類において口縁部がより細かく、また底部はより粗く分類されてしまう。

そこで、この場合は口縁部と底部の両者を比較し、個体識別数の多い方を採用している。多くの場合は「口縁部の個体識別数＝その分類の個体識別数」となった。一方、破片によっては個体識別を行うのに時間がかかるとともに、その個体判別も難しいものも少なくない。具体的には青磁の無文碗である。これに関しては個体識別法に近い値を得るために破片数と口縁部計測法の値を算出し、公式を用いて算出することを行った。係数は、先ず屋敷毎に得られた破片数と口縁部計測法の数量をそれぞれ個体識別法の算出値で割り、係数を求めた。

宇野(1992)によれば計量は個体識別法によって算出することが最も正確であるとしているが、膨大な量の個性の少ない資料が出土している場合には使いにくいとされる。そこで、文様のある個性的な資料については基本的には個体識別法によって集計を行う。一方個性の少ない大量の破片については、破片数と口縁部計測法の数値を求めこれに下記の係数 $a \cdot b$ を掛けて算出される数字を推定個体数として求めた。これによって比較的簡便に集計が得られると考えた。集計に用いた公式は、以下のとおりである。

・係数 a × 破片数 = 個体識別法による推定個体数

・係数 b × 口縁部計測法による値 = 個体識別法による推定個体数

求められた係数 a・b はそれぞれ係数 a、係数 b として表す。前述した個性の少ない大量の遺物については、個体識別法を行わず破片数と口縁部計測法の算出値に係数 a・b をそれぞれ掛けて求めた。求められた推定個体数 a と推定個体数 b を平均した数値を推算個体数として整理することとした。なお、端数については切り上げとした。

以上の処理を行う際問題となるのは、個体識別がやりやすい資料と、やりにくい資料をどのように認知するかということである。そこで具体的に個体識別のやりにくいと考える個性の少ない大量の破片とは、釉調がほとんど変わらない無文口縁部などとした。もちろん個体識別は経験によって差が現れる。さらに文様が画一的で色が複雑な物ほど個体識別は容易で正確な個体数に近づくものと考え。このような資料条件に起因する格差を鑑みて係数の算出を行うことが重要であると考え。即ち一種類の個体識別値を参考とするのではなくいくつかの資料を用いるのが好ましいと考えられる。この場合の幾つかの分類は、できるだけ多くの個体を算出した資料が誤差が少ないと考え、上位 3 つの平均とした。

以上、資料が持っている条件考慮した上で、各遺跡において個体識別法に近い個体数を比較的簡便に、より安定して効率的に算出できるのではないかと考えた。上記の行程をまとめると。

- ①型式分類を行う。
- ②型式毎に口縁部、胴部、底部に分類する。
- ③それぞれの型式毎に口縁部、底部の破片数を層位や遺構毎に集計する。
- ④屋敷地毎に口縁部、底部を口縁部計測

	分 類	部位	破片数	口縁部計測法	個体識別	係 数		推定個体数
						a	b	
屋敷地 1	青磁細連弁文碗	口縁	310	11 14/16	129	0.42	10.86	129
	青磁雷文帯碗	口縁	189	7	61	0.32	8.71	61
	青磁腰折皿	稜花	85	4 12/16	21	0.25	4.42	21
		無文	65	3 8/16	48	0.74	13.71	48
	青磁盤	口縁	54	1 12/16	22	0.41	12.57	22
	白磁外反皿	口縁	25	1 2/16	18	0.72	16.00	18
		底部	22	2 12/16	12	0.55	4.36	
	白磁直口皿	口縁	42	2 3/16	24	0.57	10.97	24
		底部	13	5 1/16	11	0.85	2.17	
	青花直口碗	口縁	39	1 8/16	37	0.95	24.67	37
	青花皿外反皿	口縁	34	1 6/16	28	0.82	20.36	28
		底部	18	1 14/16	16	0.89	8.53	
	褐釉大型壺	口縁	10	1 1/16	10	1.00	9.41	10
	係数平均					0.65	11.29	
屋敷地 3	係数上位 3 位の平均					0.49	11.09	
	青磁無銘連弁文碗	口縁	10	10/16	10	1.00	16.00	10
	青磁細連弁文碗	口縁	400	16 8/16	159	0.40	9.64	159
		底部	45	13 6/16	43	0.96	3.21	43
	青磁碗雷文帯	口縁	124	4 1/16	52	0.42	12.80	52
		型押し	22	1 2/16	14	0.64	12.44	14
	青磁口折皿	Ⅱ群	40	2 15/16	28	0.70	9.53	28
	青磁直口皿	無文	32	1 15/16	24	0.75	12.39	24
	青磁腰折皿	稜花	93	5 13/16	45	0.48	7.74	45
		無文	40	2 1/16	38	0.95	18.40	38
	青磁盤	口縁	73	3	66	0.90	22.00	66
	白磁無文外反碗	口縁	19	14/16	13	0.68	14.86	13
		口縁	69	3 10/16	38	0.55	10.48	38
	白磁外反皿	底部	30	2 8/16	26	0.87	10.40	26
		口縁	43	2 5/16	22	0.51	9.51	22
屋敷地 4	白磁直口皿	口縁	28	1 5/16	21	0.75	16.00	21
		底部	28	1 5/16	21	0.75	16.00	21
	青花外反碗	口縁	63	2 5/16	39	0.62	16.86	39
	青花直口碗(C群)	口縁	45	2 11/16	26	0.58	9.67	26
	青花直口碗(D群)	口縁	82	3 10/16	54	0.66	14.90	54
	青花碗(主郭Ⅶ類)	口縁	13	10/16	12	0.92	19.20	12
	青花外反皿	口縁	35	2	30	0.86	15.00	30
		底部	22	1 14/16	14	0.64	7.47	14
	褐釉陶器小型壺	口縁	16	2	15	0.94	7.50	15
	褐釉陶器大型壺	口縁	20	1 8/16	20	1.00	13.33	20
		底部	14	8/16	13	0.93	26.00	13
	係数平均					0.74	13.14	
	係数上位 3 位の平均					0.65	15.51	
I 区	青磁無銘連弁文碗	口縁	10	5/16	10	1.00	32.00	10
	青磁細連弁文碗	口縁	372	13 2/16	125	0.34	9.52	118
		底部	26	13 9/16	24	0.92	1.77	18
	青磁碗雷文帯	口縁	154	5 15/16	109	0.71	18.36	104
		型押し	15	1	13	0.87	13.00	10
	青磁口折皿	口縁	29	1 15/16	20	0.69	10.32	17
		底部	14	4/16	13	0.93	52.00	12
	青磁直口皿	有文	17	1 11/16	15	0.88	8.89	11
	青磁腰折皿	稜花	85	6 2/16	29	0.34	4.73	27
		有文	20	1 11/16	18	0.90	10.67	16
	青磁盤	口縁	67	2 7/16	28	0.42	11.49	25
	白磁無文外反碗	口縁	13	9/16	13	1.00	23.11	13
		口縁	16	13/16	16	1.00	19.69	16
	白磁外反皿	底部	13	1 4/16	11	0.85	8.80	11
		口縁	27	1 14/16	25	0.93	13.33	25
I 区	白磁直口皿	口縁	35	1 5/16	27	0.77	20.57	27
		底部	54	1 15/16	44	0.81	22.71	44
	青花外反碗	口縁	54	1 15/16	44	0.81	22.71	44
	青花直口碗(C群)	口縁	10	1 14/16	10	1.00	5.33	10
		底部	17	13/16	16	0.94	19.69	16
	青花直口碗(D群)	口縁	16	1 7/16	15	0.94	10.43	15
	青花碗(主郭Ⅶ類)	口縁	17	11/16	10	0.59	14.55	10
		口縁	38	1 11/16	36	0.95	21.33	36
	青花外反皿	口縁	34	3 1/16	28	0.82	9.14	28
		底部	11	1 7/16	11	1.00	7.65	11
	褐釉陶器小型壺	口縁	11	1 7/16	11	1.00	7.65	11
	大型壺	口縁	14	1 4/16	10	0.71	8.00	10
		底部	14	1 4/16	10	0.71	8.00	10
	係数平均					0.85	14.65	
	係数上位 3 位の平均					0.62	16.86	
I 区	青磁細連弁文碗	口縁	50	1 15/16	33	0.66	17.03	33
		底部	15	8 3/16	15	1.00	1.83	15
	青磁雷文帯碗	口縁	32	1 1/16	20	0.63	18.82	20
		底部	11	1 3/16	11	1.00	9.26	11
	青磁腰折皿	稜花	20	14/16	19	0.95	21.71	19
		無文	18	14/16	15	0.83	17.14	15
	青花外反皿	口縁	12	6/16	12	1.00	32.00	12
	係数平均					0.87	16.83	
	係数上位 3 位の平均					0.76	12.56	

第 4 表 係数の算出

法によって個体数を算出する。

⑤幾つかの型式について個体識別法によって個体を求める。

⑥個体識別法と口縁部計測法及び破片数の結果から係数を求める。

※今回は各屋敷値より得られた個体数の多いもの上位3つの平均値を用いた。

⑦求められた係数から青磁無文碗口縁部資料（外反・直口）の推算個体数を求める。

※分類で胴部片しか無いもの、あるいは特別な器種の集計にあたっては胴部においても随時個体識別法を用いて算出する。

3. 口縁部計測法

口縁部計測法は口縁部の平面形が円形について行うもので、計量は口縁部を直径に相当する円周の上に置き、残存する口縁周の長さ／復元した口縁の長さを読み取り、計量する方法である。器種の組成を出す場合には個体識別法に近い精度を期待でき、また、資料の個性や量に基づく誤差は最も少ない方法であるとされる（宇野1992）。今回の調査で得られた資料は小片であることから、推定円周（＝これまで出土した遺物より得られた資料を参考に算出した）上に小破片を並べて、まとめて記録する形で資料化した。

4. 係数の算出

今回、係数を求めるにあたっては周辺遺跡の各地点で検討を行った。これは、それぞれの地点間で遺物の遺存状況が異なると考えたからである。係数の算出にあたっては第4表の資料を用いて行った。この結果、屋敷地1では係数aを0.49、係数bを11.09。屋敷地3では係数aを0.65、係数bを15.51。屋敷地4では係数aを0.62、係数bを16.86。その他のI区では係数aを0.76、係数bを12.56とした。なお、その他の「IV区」や「道跡」「ハラクブ」については全て個体識別法による。

5. おわりに

以上の行程によって算出された個体数だが、次のような問題点も残る。

1. 胴部資料のみの出土の場合は個体数としてはゼロとなるため、公式を充てずに個体識別法によって算出された数値を用いること。
2. 係数の算定基準となる個体別識別法の集計遺物は、あくまでも経験則で得た個体把握となる。このため文様・装飾の豊かな資料（例：青花）についてはある程度実数に近い数値を得られる。一方、装飾に乏しい資料（例：青磁の無文資料や白磁、褐陶器等）については個体識別自体が経験によって左右される可能性が高いと考えられること。
3. 遺物の集計は基本的に屋敷地毎に行っている。しかし接合などによって遺物がそれぞれの屋敷地を越えた場合に遺物がどちらに帰属するかについては問題点が残る。これは接合しない場合にも同様で、例えば実際には屋敷地3で使用されていた遺物が何らかの原因によって口縁部や胴部の一部が屋敷地4で出土した場合は同じ遺物がそれぞれの屋敷で1個体として拾われてしまう可能性があること。

出土遺物の集計は、今回報告で用いた個体識別法が最良というわけではない。従来どおりの破片数の計数や口縁部計測法、あるいは重さを計量する方法や特定の部位をカウントする方法など様々である。いずれの方法を採用にするにせよ報告書でこれを明記し集計を行うことが肝要であると考え本節を設けた。

参考文献

宇野隆夫 1992年「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 国立歴史民俗博物館

第6節 堆積土の採集

今回の調査では遺物回収に際して幾つかの試みを行った。一般的に現場における出土遺物の回収は肉眼・目視による回収を基本としている（pick up法）。旧表土や耕作土については比較的大きな掘削道具であるクワやスコップ、鋤簾等で掘削し、遺物包含層では手鍬などのやや小型の道具を使用する。さらに遺構の精査ではねじり鎌やヘラ、スプーンなどで掘り進めている。このような調査ではミリ単位の微細な遺物や陶磁器の小片などを見逃しているしている可能性を否定できない。また、土壌に含まれている炭化種子やビーズなどの小さい物、錆付いた鉄製品など土色と遺物の色が近似するもの等、視認困難な遺物を相当量見逃していると考えられる。そこで、遺跡の包含層の土壌、遺構内の覆土の一部を採集・サンプリングして分析を行うことを計画した。

採集された土壌は事務所へ持ち帰り、その後乾燥させ、フローテーション（flotation）法によって処理を行った。フローテーション法は欧米では1930年頃には既に知られていたようであるが、本格的に発掘調査に利用されたのは1960年代からとされる（高宮2004b）。フルイや水洗法と異なり、土壌に含まれている炭化した植物遺体を浮遊させて回収する方法で、近年では今帰仁村で実施したシイナグスクのサンプル土壌を高宮広土氏の指導のもと分析を行い成果を得ている（高宮2004a）。

手順として先ず土壌を乾燥させる。採集された土壌については全て台帳を作成し整理を行った。そして優先順位を付け順次サンプルされた土壌のフローテーション処理を行った。フローテーションの方法は、①土壌を専用の水槽に沈め重い砂粒や遺物を沈殿させる。②軽い植物遺体は浮かせ、浮いた植物遺体を2段重ねのフルイで回収する。③沈殿してフルイに掛かったHF（Heavy Float）と浮遊させ得られたLF（Light Float）に分け保管。④HFについては砂とともに現場で回収されなかった小さな遺物が混在していた。具体的には魚骨やビーズ、あるいは土色の色に近い見逃されていた鉄製品なども回収することができた。また、これも試験的にはあるが浮遊しなかった炭化物についても選別した。⑤LFについては炭化物を粒状のものとするでない木片の炭に分け、前者については分類を行った。

しかし、今回は保管された全ての土壌をフローテーション、更に分析するのは時間の制約上困難であった。このため、一定のサンプル土壌についてフローテーションを行い、一部の遺構内出土の炭化種子について紹介している。なお調査を通して採集された堆積土は各屋敷地の遺構内覆土である。この採集土の中から、実際に分析を行ったのは屋敷地1がI-14グリッドの遺物包含層（Ⅱ区b-Ⅲ層）より49リットル。屋敷地3ではSK92、SK520の各遺構内覆土よりそれぞれ24リットルと20リットル。屋敷地4はSK102の土坑の遺構内覆土を約50リットルフローテーションを行っている。

※フローテーションに用いたフルイのメッシュサイズは下記の通りである。

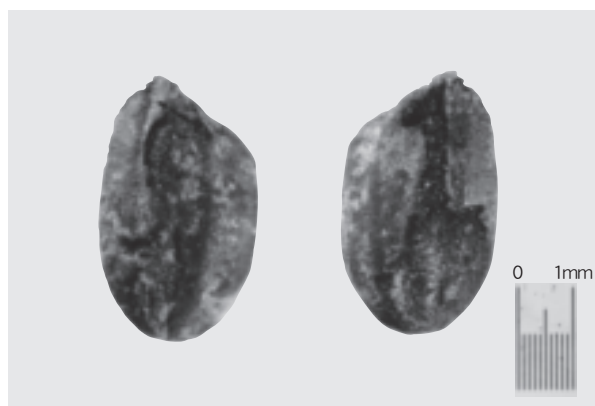
HF：（フルイ）2mm LF：（フルイ上段）2mm、（フルイ下段）0.425mm

種子の同定は高宮広土氏に同定いただいたシイナグスクのサンプルと参考文献等の写真を参照に宮城が肉眼と双眼実体式の顕微鏡（ネイチャースコープ「ファール」）を使用し行った。

参考文献

高宮広土 2004a「シイナグスク出土の植物遺体」『シイナグスク』今帰仁村文化財調査報告書第17集 今帰仁村教育委員会

高宮広土 2004b「沖縄諸島先史時代の植物利用－貝塚時代後期を中心に－」『考古資料大観』第12巻貝塚後期文化 小学館



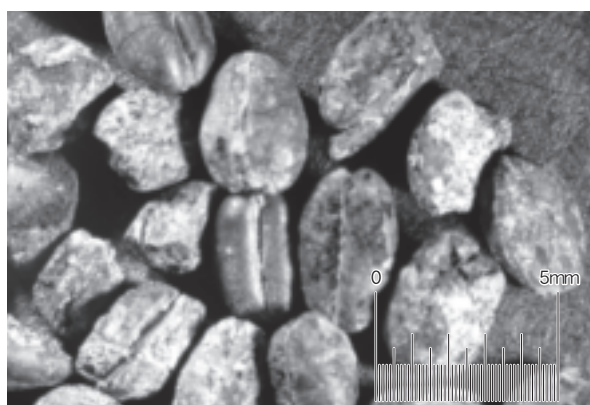
1. 屋敷地 3 SK92出土 イネ



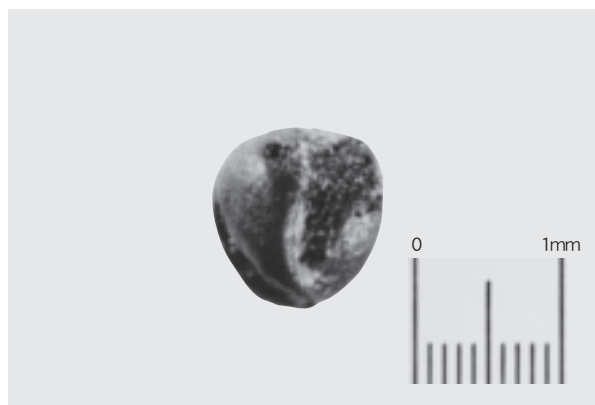
2. 屋敷地 3 SK92出土 コムギ



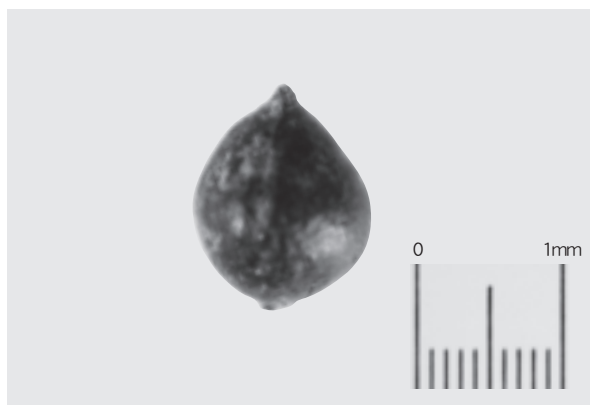
3. 屋敷地 3 SK92出土 オオムギ



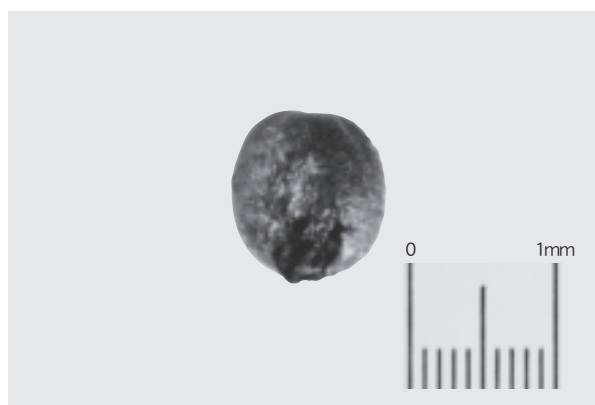
4. 屋敷地 1 出土 コムギ



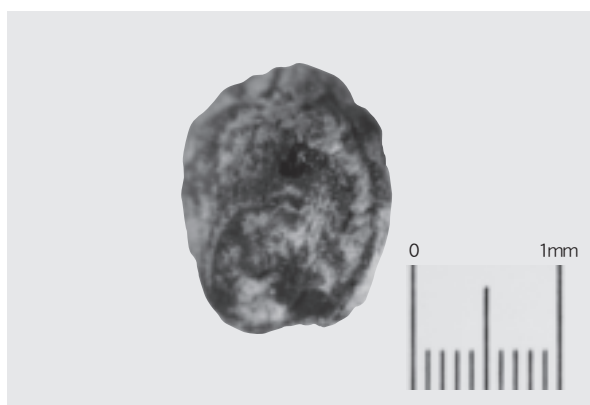
5. 屋敷地 3 SK92出土 アワ



6. 屋敷地 1 出土 ヤヤツリグサ科?



7. 屋敷地 1 出土 キビ?



8. 屋敷地 3 SK92出土 同定不明植物遺体